
真宗大谷派学校連合会共催事業 親鸞エッセイコンテスト

親鸞さんに、 いま、伝えたいこと 受賞作品集

募集要項

- | | | | |
|---------|---|---------|---|
| 1. 募集内容 | 親鸞さんに、いま、伝えたいことをエッセイ形式で書いてください。【800字以内】
詳細については、下記 URL でご確認ください。
http://www.otani.ac.jp/shinran | 4. 応募期間 | 2015 年 7 月 13 日（月）～9 月 24 日（木）必着 |
| 2. 応募対象 | ①中・高校生部門 ②大学生部門 ③一般部門 | 5. 表彰 | 各部門から最優秀賞 1 名
（賞状および副賞として図書カード 3 万円分を贈呈）
各部門から優秀賞 2,3 名
（賞状および副賞として図書カード 1 万円分を贈呈）
奨励賞若干名（賞状および副賞として図書カードを贈呈） |
| 3. 応募方法 | ①ワープロ、または手書き
②チラシの裏面、または大学ホームページに用紙のデータがありますので、そちらをご利用のうえ、応募作品に氏名（フリガナ）・住所（〒）・電話番号・応募部門を記載して下記に送ってください。
※中・高校生、大学生部門は学校名・学年も記載してください。

【郵送】〒603-8143 京都市北区小山上総町
大谷大学企画課「親鸞エッセイコンテスト」係
【FAX】075-411-8149
【メール】 kikakuka@sec.otani.ac.jp | 6. 表彰式 | 最優秀賞者は 11 月 22 日（日）に大谷大学で表彰します。
受賞作品は、大谷大学ホームページや各種広報誌にて公表・掲載（奨励賞は氏名のみ）します。
受賞の連絡は 11 月 9 日（月）に本人に通知します。なお、応募作品は返却しません。また応募作品の著作権はすべて大谷大学に帰属します。
※各部門の最優秀賞者には表彰式の交通費（上限 2 万円）を支給します。 |
| | | 7. 問合せ | 大谷大学企画課「親鸞エッセイコンテスト」係
TEL.075-411-8115 |

協力・後援 協力：真宗大谷派（東本願寺） 後援：京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会



【中・高校生部門】

最優秀賞

京都光華中学校 第3学年

ただ あい み
多田 愛海

「あと 0.07 秒……」私は唇を噛んだ。涙が流れて止まらなくなるのを必死で耐えた。全国大会の切符がかかった標準記録の突破まで、あと 0.07 秒……追い風さえあれば、絶対に行けていたはず……しかし、風は吹かなかった。陸上に懸けた最後の夏が終わった。

私の通っている京都光華中学校は浄土真宗の学校である。この学校では「私達は大きな願いによって生かされ、見守られている」ということを考えたり、自己を見つめたりする時間があり、私も共感できることが多かった。

でも、現実となると話は別である。一緒に練習してきた部員の中で、私だけが全国大会に行けなかった。私は練習だけでなく、礼儀マナーも大切にしたい。毎日、ごみ拾いや、トイレ掃除もすすんで行った。全ての面でベストを尽くしたつもりだったのに、どうしても私だけが……「努力が報われないこともあるんだな」「仏様なんか本当にいるんだろうか」真っ黒な思いが胸の中に渦巻いた。

でも、最近こんな詩を知り、心を揺さぶられた。『私を見ていて下さる人があり、私を照らして下さる人があるので、私はくじけずにこんにちを歩く』（榎本栄一）

今ならわかる。輝いている自分だけがすべてではない。仏様は悲しいことやつらいことに姿を変えて、私に呼びかけている。「うまくいった時のあなたも、そうでない時のあなたもちゃんと見守っているよ」と。

私は傲らず落ち込まず、周りに感謝しながら誠を尽くす人でありたい。人を暖かく包んであげる人になりたい。

仏様は本当にいらっしゃる。そしてそのことを最初に私たちに教えてくださったのがあなた、親鸞さんだ。あなたも仏様と共にいつも私達を見守っていてくれる。

今、私は風の中にいる。その風は、私を全国大会に連れて行ってくれる風とは少し違うかもしれない。でも、もっと深く大きなものを私に運んでくれる風だ。この風に吹かれながら、これからも私の道を走っていこう。



【中・高校生部門】

優秀賞

北海道大谷室蘭高等学校 第2学年

窪田^{くぼた} 理央^{りお}

親鸞聖人。あなたのお話を聞いて、私はどんなことがあっても頑張っていこうと思いました。

宗教の授業で名前は聞いたことはあったけれど、どのような人かは知らなかった「親鸞聖人」のお話を聞いた7月23日。外部から来てくださった講師のお話を聞いて人間に不可能はないのかな、という考えを持たせられました。人間には悩みや苦しみのような煩惱があり、それをなくしたいと思うのが人間だが、親鸞聖人の考えは真逆で煩惱をなくすことができないという現実を受けとめて、生きていこうというものでした。人間うまくいかないことばかりで辛いこと・苦しいことの方が多い人生があたりまえで、そんな人生だからこそ、たまに起こる嬉しいことがとびっきり嬉しい出来事になるのだと私は感じます。だから、辛い出来事に直面したとしても簡単に弱音を吐かず、妥協しないで、むしろ、今は苦しいんだからこれからいいことが訪れるというくらいの気持ちで何事も乗り越えていきたいと思いました。

阿弥陀様の考えに一つの何かでその人の尊さを決めることはできない、誰しもが量ることのできない命をもって生きている、というものがあります。その考えを現代では“南無阿弥陀仏”という仏教用語で受け継いでいます。何百年、何千年前の先人たちの思いを語り継いでいる宗教はすごいものです。お経を読むにあたっても、今までは正直適当に読むことが多かったのですが、一つひとつに当時の人の思いが込められているんだと感じながら読んでいくようにしたいです。

私は宗教を通じて、たくさんのかんじることができました。日々受け継がれている先人の思いをもっと多くの人で共有し、未来に受け継いでいきたいです。そして、少しでも多くの方が宗教を大切に思っています。

親鸞聖人。あなたの思いは現代でも生きていますよ。

【中・高校生部門】

優秀賞

飯田女子高等学校 第2学年
しまおか こはる
島岡 小春

私は、どの自分が本当の自分なのかが分からなくなったことがありました。それは、いつも周りから良く思われたい、嫌われたくない、良い子でいたいと思って「他人にとって都合の良い人」を演じていたからです。特に中学校の時は誰に対しても「その人にとって良い子」を演じていました。人から何か頼まれるとすぐ「良いよ。大丈夫。私がやる」と言って引き受けていました。さらに私は一人になることが怖かったので、分からない話も分かっているふりをして聞いていました。そして、ずっとこのようなことを繰り返していたので次第に自分を見失っていきました。それに気がついたのは自分の笑顔を見た時でした。学校行事で撮った写真に写った自分の顔を見ると、みんなと同じように笑っているのですが、どこか空っぽな笑顔でした。中身のないような、まるで仮面をかぶったような笑顔がありました。私は中学校の時、心から笑った記憶がありません。学校では誰からも悪く思われないようにずっと偽りの笑顔をしていたので、本当の笑顔を作る方法を忘れてしまいました。そんな自分がずっと嫌いでした。

しかし私は高校生になって「自分を出せる場所」を見つけることができました。なぜならそれは「私は私で良い」ということに気づいたからです。「素を出せば誰かに迷惑を掛けるかもしれない、良く思われないかもしれない」と思うこともありますが、それを全て含めて自分なんだと思います。そしてそんな私を認めてくれる周囲の人にはもっと感謝しなければならないと感じています。なぜなら今こうして存在している私は、私一人で成り立っているわけではなく、周りの人の支えで成り立っているからです。

親鸞さん、私の毎日は常に自分との葛藤に満ちています。私の「自分探しの旅」は長くなりそうです。旅を終えて成長するまでこんな私を見守っていて下さい。



【中・高校生部門】

優秀賞

名古屋大谷高等学校 第3学年

しんかい あかり
新海 明里

私は名古屋大谷高校という学校に通っています。生徒数の多い学校で、勉強のできる人やできない人、部活に入っている人や入っていない人、スポーツができる人やできない人、友たちがいる人やいない人、本当に色々な人がいます。私が通っている学校だけでもこんなに色々な人がいるのですから、日本中で、さらに世界中でとなると、もっともっと多くの人たちがいるのでしょう。

ただし私には、このように色々な人がいても、自分一人でも何でもできると考えている人が多いように思えます。そのような人たちは常に他の人より上に行くことを目指しています。学校でも、テストを受けて順位が決まりますし、スポーツでも順位を競ったりしています。なかには、恋人がいるかいないかで張り合ったりしている人もいます。しかし私たちが住んでいるこういう社会の考えと、親鸞さんの考えはまったく別のものでした。

親鸞さんの考えた「浄土真宗」の教えとは、浄土を求めて生きる、ということでした。親鸞さんが求めたこの世界は、男子生徒も女子生徒も、勉強のできる人もできない人も、スポーツができる人もできない人も、友たちがいる人もいない人も、たとえどんなにたくさんの方がいても、みんなが尊敬し合い、支え合い助け合う世界です。そういう世界を親鸞さんは「浄土」といったのです。

しかし、みんなが支え合い助け合うこうした世界を実現するのは簡単なことではありません。やはり人は誰かに負けることが嫌いで常に自分が一番であることを目指しているからです。それでも、もし少しずつでも一人ひとりが支え合い助け合うような繋がりができたなら、そこがそのまま親鸞さんの求める「浄土」になるのです。私もまた、それが簡単ではないことはわかっていますが、この社会をみんなが支え合い助け合う世界にしたいと思います。

名古屋大谷高校に入学して、「宗教」の授業を受けたことで私は何よりも大切なことを学ぶことができました。



【中・高校生部門】

優秀賞

大谷高等学校 第3学年

ほりいけ もえみ
堀池 萌水

自分の大切な人が苦しんでいる時に何もできないということほど、悔しいことはない。そんな場面に遭遇してまた、わかっていたはずなのに、私は思い知らされる。ずっと後になって同じように苦しんではじめて、ああこんなにもつらいのかとを感じるが、それでも自分が同じように苦しんでいるとは、決していえないのである。

それでも手を差し伸べたいと思わずにいられないのは、私もそれまで多くの誰かに助けられてきたからであって、私以外の生きている者すべても同様だろうと私は感じている。

親鸞さんの生きていた時代から時を経て、世界はすっかり様変わりした。私たちはあらゆる手段で、世界のどこかで苦しむ人がいることを知らされ、それを実に大きな規模で考え、議論し、力を尽くせるようになったのである。一体親鸞さんはこの変化をどのように思うのだろうか。

私には恐れていることがある。それは私も含め皆、誰かの苦しみを、理解しているだなんて言えないのを、忘れてはいやしないかということ。そして私たちはこれを忘れたまま、凄まじいスピードで、その速さが故に、時には感情の高ぶりにまかせ、思慮に欠けた考えを発信できてしまうということだ。

今この時代を生きる私たちに必要なのは、分かり得ない苦を自覚し、熟考することではないだろうか。分からないから諦めるという選択肢がないのを、苦しみ・助けられ生きる私たちは知っている。だからこのスピードの時代に、立ち止まってみる必要があると思うのだ。

本当は、考える力があれば、表面的な論争にとどまることがない上、ついには苦しめようとする心も、静まりなくなっていくのではないだろうか。自分の周りの大切な人のことも、世界の誰かのことも、深く考えられる私でありたいと今日も思う。

【中・高校生部門】

奨励賞

大谷中学校 第1学年
にししか くるみ
西坂 来美

あのね、親鸞さん。今私がいるこの世の中には“いじめ”というものがあるの。そのいじめは陰でコソコソ話して標的を作ってその人を精神的、あるいは肉体的に苦しめることなんだ。

私はそのいじめを見たことがあって、その人だけノートが配られてなかったり、無視されていたんだよ。

でも私は、こわくてただ見てるだけだった。そんな自分に腹がたって次の日、「私と一緒にいる？」って聞いたら、「ありがとう」っていったんだ。

こんな風に気づいて、手をさしのべてくれれば大丈夫なんだけど、皆が皆その人を苦しめたら、もう誰にも言えないし、きっと心の中で泣いていると思うんだ。

だから絶対いじめはしちゃいけない事とそれを見た人は止めなければいけないことをもう一度みんな考え直してもらいたい。そのためにも全力で友達に言って回りたい。

そして、もちろんいじめもしちゃいけないことなんだけどそれと同時に、冗談で、人が傷つくことを言う事もダメで、私はそれを何度か体験したんだ。

言われた事は、「今日から無視するから」とか「おい、なぐるぞ」とかで、どこまでが本気か分からないから相談したいけど、全くの冗談だったときの不安やはずかしさから相談できない。それが本当に悲しくつらいんだ。

親鸞さんは本当に世の中の事を考えてらっしゃったのだと思うんだ。でもね、私が見えている世の中はすごくせまいのだけど、それでもよく目にするのはこのいじめといやな冗談。私はそれをゼロにし、今まで仲間の暖かさを知らなかった人達に、知らせてあげたいんだ。

これが私の小さく見えて実は大きい目の前の夢。

親鸞さん、私はこの夢を叶え、一つでもいじめをなくすことができるのでしょうか。

【中・高校生部門】

奨励賞

盈進高等学校 第2学年
はしもと せな
橋本 瀬奈

親鸞さん。私の Family history を聞いて下さい。

私の父方の曾祖父は 70 年前の 8 月 6 日、広島で原爆に命を奪われました。32 才でした。

私は、高校から、核廃絶署名活動に参加し、被爆者の壮絶な人生を胸に刻んできました。そして、曾祖父の最期を詳しく知りたくなり、今夏、家族と調べました。

7 月、親戚宅で曾祖父の写真と対面。徐々にあの日の曾祖父の姿に近づいていきました。曾祖父は、広島県警の警察官でした。遺骨も遺品もありません。亡くなった場所もわかりませんでした。ただ、最期の言葉だけは、親戚に語り継がれていました。「水がほしい」。妻子を残し、さぞ、無念だったでしょう。

8 月 5 日、私は、日本原水爆被害者団体協議会主催の「平和のつどい」で高校生代表としてスピーチをする機会をいただいていた。内容に、曾祖父のことも含んでいました。

奇跡が起こり始めました。前日 4 日の夕方、問い合わせしていた県警から母に、「小川菊雄（曾祖父）さんは、旧県庁で敵機の監視業務時に亡くなった」と連絡がありました。スピーチ当日、会場に行って絶句しました。そこが、曾祖父の亡くなった旧県庁の跡地だったのです。70 年間、曾祖父は私を、そして、家族を待っていたのだと、全身で感じ、涙が溢れて止まりませんでした。

後日、「殉職警察職員之碑」を訪れ、曾祖父の名前を探していました。すると、薄暗い木陰から、曾祖父の名前のところだけに、ぽっと光がさしたのです。曾祖父が私の来訪を喜び、「ここだよ」と教えてくれたのです。

この奇跡。偶然と思えません。曾祖父は、私の活動を応援してくれているのです。そして、阿弥陀様が、家族の絆をつなげてくださったのだと、私は確信します。南無阿弥陀仏。

親鸞さん。見ていてください。私は必ず、「もう誰にも同じ思いをさせてはならない」という被爆者の敵対と復讐を超えた素朴で崇高な平和の思想を、人類の未来につなげます。

【中・高校生部門】

奨励賞

札幌大谷高等学校 第3学年

ふじい みか
藤井 望加

親鸞さんへ。私は欲望に支配されながら苦しい毎日を送っています。高三という年のせいか悩みはとて多いです。特に最近「愛別離苦」という苦しみを強く感じた経験をしました。

私の母は私が産まれる前から病気でした。買い物をする以外はずっと家で寝ていて、周りのみんなのお母さんがどんなにうらやましかったことか。時々幻聴のせいで変なことを言ったりもします。ある朝、父に呼ばれて目を覚ますと、父は私に「お母さんがいなくなった」といきなり言いました。私は今まで感じたことがないほど寒気がしました。母はきっと自殺したんだ。父は「かぎはかけなくていいから学校へ行きなさい」と言って探しに行ってしまうしました。学校では平気だったけれど、帰り道とても恐ろしかったです。母が死んだと現実で聞かされたらどうしよう。家に親戚が集まっていたらどうしよう。そして地下鉄に座っていると涙があふれました。あんなに嫌だった母と別れられるはずなのに涙が止まりませんでした。調子がいい時には冗談を言いあったり、姉と三人で双六をよくやったこと。おばあちゃんと母と買い物に行ったこと…母とのよい思い出が胸をうちました。ああ、私は母を愛していたのだと感じました。幸いにも最悪の事態とはなりませんでした。母は見つかりました。

この事件を機に私は大きく成長しました。あたりまえだと思っていたことがあたりまえではないのだと思うようになりました。そして周りの人へ感謝できるようになりました。いつも優しく丁寧に教えてくれる先生、だめな私をしかってくれる友達、小さい時よく旅行につれていってくれた親戚のおじさん、おばさん。家族、そして親鸞さん。ありがとうございます。将来はいっぱい勉強してたくさんの人のために薬をつくっていききたいと思います。恩返しのつもりで悩みに負けず頑張ります。



【大学生部門】

最優秀賞

大谷大学文学部教育・心理学科 第1学年

なかむら
中村

みさ
美沙

親鸞さん、私は、自分よりも他を大切にすることができません。私のおこないは全て自分のためのものなのです。こんな私をどう思われますか。

例えば、私が人に親切にするのは「自分ができることでその人の負担が減るなら喜んでほしい」という気持ちと、「ありがとうと感謝されること、笑顔を向けられることが嬉しい」という気持ちがあると同時に、「人に親切にしてあげる私って良い子でしょ」という手前味噌と優越感、「親切にすることで愛されたい、認められたい」と思う承認の欲求、「親切にしてあげたんだから私にも親切にしてね」と見返りを求めるサインなのです。この様に私のおこないの全てに自分本位な考え方が必ず付いてまわるのです。

私がこのエッセイコンテストに応募するのも、「周りから良く思われたい」という気持ちや、「自分は他と違う」と得意になりたい気持ちが含まれているのです。

「罪や障りはそのまま功德のもとになる。氷が多ければ多いほど、溶けた時の水が多くなる様に、罪や障りが多ければ多いほど、後に得られる功德も多くなる」

(『真宗聖典』四九三頁「高僧和讃」)

親鸞さん、私はこのお言葉を「苦悩したり試行錯誤することが自分を成長させていく」という意味だ、と捉えました。どこまでも自分本位な自分について考えることは空しく、苦しいことですが、そこから逃げずに向き合い、試行錯誤することによって何か、大切なことが見えてくるのでしょうか。

氷はすぐに溶けるものではありません。それに私は沢山の氷を持っています。溶かし方さえも分かりません。しかし、氷はいつしか溶けて水になります。私には沢山の水を得られる可能性があります。無知なのでのびしろがあります。

親鸞さん、私は自分から逃げず、向き合っていこうと思います。





【大学生部門】

優秀賞

大谷大学文学部仏教学科 第3学年

おくおか
奥岡

さえこ
沙英子

私たちが生きているこの時代は、驚くほど便利です。多くの情報が飛び交い、流されていきます。それと同時に、自分にとって本当に必要なものさえも流されてしまっている様な気がしてなりません。

例えば、世界のどこかで痛ましい事件が起きた事を知ったとします。しかし、その記憶はきっと、一週間もすれば新しい情報で塗り替えられてしまうでしょう。私たちにとってネットやテレビなどで得られる温度のない情報は、限りなくフィクションに近い物なのでしょう。私も、心のどこかで自分とは関係のない遠い世界の出来事だと受け流してしまいます。

親鸞聖人は法難にあった際に、対立する立場の僧たちを「然るに、諸事の釈門、教に昏くして」と評しています。「教に昏い」つまり教えを正しく知る事が出来ていないために彼らはそうせざるを得なかった。決して彼らを批判するのではなく、むしろ案じているようにさえ感じられます。

仮に私が迫害される立場だったとして、そのように対立する側の人々を案じる事ができるでしょうか。同じように、それを傍観する第三者だったとしても、できるはずがありません。私たちには、物事を傍観し他人事として受け流す癖がついています。誰もが「自分には関係ない」と考えた事があるのではないのでしょうか。

また、すべての生きとし生けるものから不安や苦しみが無くなるようにと、心から願えない私があります。例えば、罪を犯した人を見て「悪い人」と決めつけます。親鸞聖人が「さるべき業縁のもよおせばいかなるふるまいもすべし」と仰ったように、誰もがそうなり得るはずなのに、自分には縁のない事と考えています。どうすれば人びとの悩み苦しみに寄り添い、考える事ができるのか。親鸞聖人も葛藤したことでしょう。私たちにとって大きな課題です。

いつの時代も私たちは、色々なことを見失い惑わされて生きていますが、本当に大切にすべき事はきっと常に同じなのでしょう。





【大学生部門】

奨励賞

札幌大谷大学社会学部地域社会学科 第1学年

佐藤 実結

先日、ある授業のなかで「ヘイトクライム」というものを知った。学生が具体的に理解できるよう用意された映像には、「中国人や韓国人は日本から出ていけ」と叫ぶ人々がいた。一方でそのデモをやめるよう呼びかける人々もいた。「憎しみは何も解決しない」と書かれた横断幕をかかげていた。個人の思想だからこのことに関してどうすべきかという正解はない、と先生は言った。どう思うかはそれぞれだと。私は、なぜ外国人を排除しようとするのか、なぜ認め合わないのか、と感じた。

領土問題や歴史的背景も絡み、日中・日韓の仲は深刻だ。中国・韓国でも日本を否定する内容のデモをしている。だが、数年前には四川省大地震やセウォル号沈没事故 — これは断られたが — で日本は手を差しのべ、中国や韓国は日本に対し感謝の意を示した。特に四川省大地震では、日本の自衛隊が崩壊した家の下じきになり亡くなった人々を、屋根のある場所まではこび、涙ぐんで手を合わせた。それを知った中国人もこの行為を称賛した。互いに認め合う気持ちを持っているはずなのに、なぜ人々は攻撃してしまうのだろうか。

「光明無量」「寿命無量」という言葉を本で見た。そこに見い出した一切の衆生をもって自己とする、自己の命の内容とする、という願文だという。一切の存在を離れて自己を持たないという自覚がある、そういう浄土において見い出してくる自己というものを、親鸞聖人は「われら」と表している。

自己を持たないとはどういうことなのか、と私は疑問に思った。自己を持たないとはあまりに難しいことではないかとも感じた。しかし、もし自己を持たないということができれば、強い自己主張がなくなり、他者を認めることができるのではないだろうか。他国の文化を受け入れるのは難しい。だが国際問題の多い現代こそ、自己を持たないことを考えるべきなのだと、私は思う。





【一般部門】

最優秀賞

あらまき こうじ
荒牧 浩二

『さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし』、歎異抄十三条にあるあなたの言葉です。

今、私は一人の死刑囚の支援に関わっています。彼は五年前、妻と義母、そして生後五ヶ月の我が子の命を奪ってしまいました。二十二歳でした。出身地を中心に 6000 筆もの減刑嘆願署名が集まる程、素朴で優しい、いつも笑顔の彼だったのに。そして、これも縁でしょうか。彼のことは事件が起こるまで全く知らなかった私が、拘置所にいる彼と面会を重ね、手紙のやり取りをするうちに、必死で罪と向き合う彼の姿にひかれ、彼との繋がりの中であなたに出会いました。

この春、刑が確定して移送された福岡の拘置所の小さな窓から、遠くに桜が見えたそうです。ある人への手紙にそのことが書いてありました。

『五年振りに桜まで見る事が出来ました。よかった、よかった』と。

人が“生きる”ということは、どういうことでしょうか。彼はおのれの犯した取り返しのない罪。永遠に失われた、三人の命と、自分自身の『死』に向き合うことで今、深い“いのち”を生きているように、私には感じられます。現在の心境を問われて、彼の手紙の中にこういう一節もありました。

『人生は生きるに値する、ということ。価値がある、ということです。うまく言えないけど、ここにいる僕でもそう感じます』

宿業とも言ふべき縁の中で“いのち”を見つめる彼の中に、人が生きるということを問い続けた、あなたを見る思いがしました。彼は刑が執行される最後の瞬間まで生を全うし、“生きる”ということの実相をきっと見せてくれるはずです。そんな彼に、私も最後まで寄り添おうと思うのです。それがきっと、私自身の生きる意味にもつながると思うからです。





【一般部門】

優秀賞

いわき むぐみ
岩城 恵

積極的に意見を言う子、さり気なくごみを拾う子、物づくりに没頭する子、半紙からはみ出す元気な字を書く子…。子ども達にはそれぞれいいところ、素敵なおもしろいところがあるなあ、と感心させられます。

一人一人がもつよさを、どうしたら認め合うことができるだろう、誰一人として欠かすことのできない存在であることを共有しながら生活できるだろう。教員生活の中で、私がずっと大事にしてきたテーマでした。

私自身、自分の理想像を子ども達に語りすぎ、一生懸命になりすぎたこともありましたが、失敗の連続の中にいつも子ども達から教えてもらったことがありました。

ちょっとやっかいな子と言われていた子と出会った四月最初の日のこと。その子のさり気ない優しい行動を偶然目にしました。私はすぐにその子に言いました。「今の行動すごいね」と。その子は少し戸惑いながら、かわいい笑みを見せました。結局その子は一年間わんぱくしながら友達思いの少年で、友達の「すごいね」もたくさん見つけ、子ども達の中にいいところを見つけ合う連鎖が始まりました。また、自分はダメな子と思い、自分を傷つける子がいました。その一人の子のために全員で三時間授業をつぶして話し合ったこともありました。一人を大切にする経験、みんなから愛される経験で、学級が何とも言えないあったかさに満ちた出来事でした。

子ども達はいつも関係の中で育っていました。自分を丸ごと受け入れてくれる学級である時、子ども達はとても幸せな顔でした。そして私も幸せでした。

比較の全く必要のない、ただただその人を丸ごと包み込んでくれる世界に子ども達と触れた時、胸が熱くなりました。きっとずっと前からこの先もこの世界は変わらずあるのだと思い、何故自分が大事にしてきたものがあったのか気付かされた気がします。親鸞さん、私はこのことを忘れず、これからも子ども達と接していきます。





【一般部門】

奨励賞

つじ 辻 ゆうこ 優子

「先立つ子どもは善智識」

この言葉を聴いたのは今を去ること三年とおよそ七ヶ月前のこと。二〇一二年三月三日、桃の節句に娘は三十二歳の若さで旅立ちました。こころの病による自死でした。親として愚かにも予想だにできなかった別れ、そこに至るまでの娘の苦しみを思うと、我を責め、後を追ってしまいたいとそればかりを考える日々でした。そんな頃、葬儀以来何とか心を配って下さったご住職から教わったのがこの言葉でした。

人生なにが起こるかわからない — 頭ではわかっていたつもりのそのことが現実には何もわかっていなかった私です。何よりも大切な我が子が親よりも先に逝ってしまうなんてあっていいはずがない！でもそれこそが諸行無常のこの世なんですね。それを教えてくれたのが娘なのだ、だから先立つ子どもは善智識なのだ、十分には理解できませんでしたが、そのようにお聴きしたのを覚えています。

そして今年一月、私の身体に癌が見つかりました。手術、抗ガン剤、放射線治療…苦しい闘病生活が続いています。再発・転移の可能性を思うと不安がないというのは嘘になりますが、これも無常の一つ、娘の悲しい出来事が教えてくれた有難いことと捉え、前向きに生きています。治療の合間にささやかな仕事も続けており、少しでも社会に役立ち、自分の生活も支え、何ごとも恐れず、寿命を全うしようと思います。

娘の死の以後、何冊か真宗関係の本を読みましたが、何百年も続いてきた教えを頭で理解しようとしても無理なことです。お念仏を忘れず、今日が一番若い日と一日々々を大切に、時折お参りするご本山で親鸞さんのご真影に静かに向き合い、掌を合わせてこうべを垂れるのが楽しみな六十四歳の私です。

さあ、次はいつ京都駅に降り立つことができるでしょうか！錦繍の秋に — 了



